



發作

石上玄一郎



發作

定價二六〇圓

昭和三十三年八月三十日印刷
昭和三十三年九月五日發行

著 者 石上玄一郎

發行者 栗本和夫

印刷者 中内佐光

發行所

中央公論社

東京都中央區京橋二ノ一
電話(56)五九二一―三〇
振替口座東京三四

春の祭典

☆

その朝、圭助は出勤途上の國電の中で人混みにもまれながら英字新聞を讀んでゐた。外國商社に勤めてゐる關係上、彼は英字紙に目を通すのを日課の一つにしてゐたのだ。

ある大見出しがふと彼の注意を惹いた。數ヶ月前、駐留軍の座間キャンプで行はれた殺人事件の公判記事だつた。被害者はロスチャイルド米軍大佐の九歳になる娘スーザンである。初冬的一天、少女は自宅から程遠からぬ池の畔の灌木の繁みに扼殺屍體となつて發見された。數日後、MPはその加害者と目せられる人物、米陸軍病院所屬のモリス・シツク曹長を逮捕した。シツクは簡単に犯行を自供した。十一月二十一日の午後五時頃、彼は現場附近の小徑でスーザンに逢ひ、數分間、立ち話をしてゐたが、彼女が歸らうとした途端、急に殺したくなり首を締めて呼吸をとめ、なほ完全に殺すため池水の中に漬けた。

殺害の動機は不明である。それが怨恨であるか痴情であるかすら不明である。だが屍體に暴行の痕跡はなく、シツク自身は殺された少女の家庭と親しかつた。少女の日曜學校の教師でもあつた。また周圍の人々は彼が平生、溫厚な信賴すべき人物であり日本人の孤兒を二人まで養女にしてゐたことを證言してゐる。

「なぜ殺したのか」法務官の訊問に對して被告は何らの感動を現はすことなく冷然と應へる
「Because it was there」(子供がそこにゐたからだ)。

それは應答にならない應答である。一見その人を食つたやうな釋明に、公判記事を讀んでゐた圭助は危ふく笑ひ出すところだつた。

電車が揺れた。

「やいッ氣をつけろ」その時、圭助は何者かの罵聲を耳にした。だが彼は別に氣にもとめず新聞を讀み續けてゐた。「他人の足を踏んだら、何とかいつたらどうだ」罵聲は今度は直ぐ彼の耳許でした。乗客の視線が一せいに、自分と自分の傍らで凄んでゐる職人風の男に向けられてゐるのに彼は氣付いた。頬骨を光らせながらその男は彼を睨んでゐる。はじめて自分はうかつにもこの男の足を踏みつけたのだといふことの納得がいつた。

「ごめんなさい」彼は軽く頭をさげた。

「ごめんなさい……だと、すつとぼけるない、この野郎……」

平手打が彼の頬に飛んだ。彼は再び詫言をいひ、辛うじてその侮辱をこらへた。

次の驛で圭助は電車をおりた。「圖々しい野郎だ。紳士面アしやがつて……」ホームへ降りる彼の背中にその男の嘲罵がなほも粘つくく絡みついてきた。

早春の肌寒い風に吹かれながら彼は次の電車をまつてゐた。だがラッシュ・アワーにも拘はら

ず電車はなかなか来なかつた。頬の上にはまだ殴つた男の掌の感觸が灼きついてゐた。彼はいらして腕時計をみた。もう自動車を拾つても間にあはぬ時刻だつた。

その朝、圭助は入社以來はじめて遅刻した。生憎とその日に限つて彼は支配人のリリエンタール氏とエレベーターの降り口で顔をあはせた。支配人は圭助を見るなり訊いた。

「どうしたね。顔色が悪いが」

「Because it was there」

思はずさう口走つてしまつてから圭助は急に氣恥しい思ひに驅られた。おのづとそれがいかにも輕薄な氣障つばい洒落になつてゐたからだ。リリエンタール氏は肩をすくめただけで何もないはなかつた。

所せまくファイルの棚に囲まれた事務室へはいつていくと、社員たちはみな机から頭をあげてさも不思議さうに彼を見た。彼が勤務時間に遅れたことは嘗つてなかつたからだ。書類の山積してゐる机を前にして坐つたが、いつもと違つて氣やすく仕事の中にはいり込めなかつた。耳慣れた筈の計算機やタイプライターの斷續的な音にすらある抵抗を感じた。

何となればそれがそこに、存在したから……それは存在した。存在する。……だがいつたい存在するとは……シツク曹長は少女の首を締めた。毛むくぢやらな大きな手が、引金ダコのできた指が、やはらかな少女の首に食ひ込んだ。なぜ？　つまり存在したからだ。……書きかけのペン

の先からインクが滴り落ち書類の上に大きな汚點をつくつた。圭助は我にかへり、一時間近くもなるのにまだやつと二、三行しか筆を運んでゐないのに氣がついた。更めて仕事に身をいれにかつたが、少し續けるとふたたびその想念に捉へられた。まるでトリモチの中に落ちこんだ蠅みたいな工合だつた。

それは果して莫迦化た應答であつたか？……自棄になつた犯罪者のでまかせな捨臺詞に過ぎなかつたか？……圭助は更に中斷された想念の續きを追ひはじめた。假令でまかせにしたところ……いやもし、出まかせならむしろもつとまじな言葉がありさうなものだ。それとも彼は狂人だつたのか？ 精神醫學でいふ衝動性人格者、一時の感動によつて殺人を思ひたつところの所謂ヘモチダー・トリープだつたのか？ さう判斷することは最も單純な解決だ。そしてまた最も安易な解決だ。だが……

ブザーが鳴つた。「支配人がおよびです」女給仕が彼に告げた。圭助は立ち上つて鱗型ガラスに Director と金文字でしるした境の扉を押した。嘗つて豫言者達がそこに異象を見たといふバレストインのものさびた曠野の風景畫をうしろにしてリリエンタール氏は坐つてゐた。曲つた大きな鼻の兩側に突き出た眼がこの中年の外人にふだんでも何かものに驚いたやうな表情を與へてゐる。彼はアメリカの市民權を持つてはゐるがドイツ生れの猶太人なのだ。はいつてきた圭助の方を氣ぜはしげに一瞥するとR音の響く、訛の強い英語で訊いた。

「インボルト・ライセンスの申請書はできてゐるかね……例のA・A物資の方だ」

「いまつくつてゐるところです」

「大急ぎでやつてくれ給へ、遅くとも午前中に……」

「承知しました」

圭助は恥辱を感じながら引き退がつた。支配人から催促を受けたのはそれがはじめてだつたからだ。軍人だつた父親の性格を受けついで彼は几帳面であり仕事のしぶりは正確だつた。入社以來、四年になるがその點では何人にも譲らなかつたし支配人もそれを認めてゐた。

時計を見ると十二時まであと四十五分しかなかつた。その時刻になるとリリエンタール氏は彼らの習慣で郊外の家へ自分で自動車を運轉し午睡に歸る。オフィスへ戻るのは二時過ぎだから、それからでは通産省や銀行向けの用事は間にあはない。それを意識することで圭助はやつと仕事に自分を集中することができた。申請書の下書きを作りあげると直ぐさまそれをタイピストに渡し、最初にできあがつたコピーの一つを持つて彼は支配人の部屋へ行つた。

いつもなら、ざつと目を通しただけで直ぐO・Kとくるところを、その日は何を思つてかりリエンタール氏は自分の書類の綴ち込みをめぐつて仔細に對照しはじめた。

「君、これはどうしたんだ」リリエンタール氏は書類の中のある個所に長い指を突きたてながら怒りを押へたもの靜かな調子でいつた。「肝心の數量が違つてゐるぢやないか」

霞んだ視野の中に浮きあがつた數字を吟味すると、たしかに三桁目のところの5が3になつてゐた。

「済みません、早速訂正します」圭助はどぎまぎしながらいつた。

「ビキニの鮪でも食ひ過ぎたのかね」

リリエンタール氏は歪んだ微笑を浮べながら圭助を熟視した。アメリカ籍の彼は水爆實驗をめぐつての、この國の反米感情に敏感なのだ。

書類は數字を訂正さへすればそれで事足りたから支配人のいふ時間までには充分間にあつた。それは他目にはとるに足らぬ些細な出來事に過ぎなかつたかも知れない。だが、そのことはある得體の知れぬ病氣の徵候みたいに彼を不安にした。彼は引き續き仕事に没頭することでの不安を拂ひ退けようと務めたが無駄だつた。圭助はいつしか机の上に今朝の英字新聞を擴げてゐる自分に氣がついた。一たん抜けだした想念の中へ、彼はふたたび投げ込まれた。

なぜ、シツク曹長はその少女を殺したか？ 裁くものは類型化された簡明な理由を探す。怨恨のため、痴情のため、あるひは心神喪失の状態にあつたため……この種の人々の遣り口は人間的一切を捨象し單純な因果關係に置き換へることにある。調書に書き込むに都合がいいのだ。だが、人間の行爲の成立する條件はしかく單一であらうか。なぜベルが鳴つたか？ ボタンを押したからだ。なぜ酸は中和されたか？ アルカリを加へたからだ。答へは實に明快だ。だが、なぜ

あの男は怒つて俺を殴つたか？ 何となれば俺が足を踏んだからだといふのは正當ではない。少なくともその男の仕掛が機械のやうに單純な構造をもつてゐたからと付け加へる必要がある。人間は必ずしもそのやうに反應しないからだ。だが所詮、人間は彼自身その行爲の隠れた意味を知ることができない。自由に擇び、確乎とした目的に向つて行動したと信じ込んでゐる場合でもだ。その行爲をもたらしした因果の網の目は入り組んでゐて、その迷路は遙かな星雲にまで續いてゐるかもしれない。それは既に出生に於て、その系統發生に於て、いや、より根源的な存在に於て決定されてゐたのかも知れないのだ。だからその錯綜した條件の一つだけを切り離して理由づけることは、偽瞞に等しい。なぜなら理由が無數にあるといふことは、理由がないと同様だからだ。それを敢へていふなら、まさにそれがそこに存在したからではないか？ それは決して莫迦化した遁辭ではない。それどころか生存の最もふかい根源に續いてゐる言葉ではないか？ だが存在とは……主助はそのやうな思辨からながいこと遠ざかつてゐた自分を改めて意識した。

もともと主助はこの會社には場違ひな人間だつた。彼は大學で美學を専攻した。だがやがて美術史の講義の瑣末主義的な傾向に退屈してくると、圖書館で手當り次第に哲學書を読み漁つた。ルネッサンス風な石造建築のひえびえとした閱覽室に坐つて、彼はハイデッガーの「形而上學とは何ぞや」を讀んでゐた。宛も一つの小宇宙を前にしたやうな充ち足りた氣持だつた。窓の外では學生達の群が銀杏の並木道を練り歩き、インターを歌つて氣勢をあげてゐた。ある誇らしげな

孤獨を感じながら彼は自らの可能性に思ひ耽つた。何よりもこの自分が何者であるかを見究めることが肝要なのだ……彼は考へた。彼は青年らしい自負をもつて、自分を他と隔絶した存在、選ばれた者と感じてゐたのだ。彼の野望はデカルトのやうに懷疑の際涯から出發して、曲りなりにも自己の地平圏に〈精神の王國〉を築きあげることだつた。

だが學窓の外に渦卷いてゐる生活の埃は、除々にその野望を埋没させていつた。彼とても突然地上に出現した隕石のやうな存在ではなくて、錯綜した現實世界の小さな結び目に過ぎなかつたからだ。觀念の上で自らを〈擇ばれたもの〉と見做すことはできても、生活の場では敗戦國のありきたりな貧しい知識階級の一人でしかなかつた。追放された退職軍人の父をはじめ、幼い弟妹達など、彼にはこの先、扶養して行かねばならぬ多くの系累があつた。美學を出ただけでは教師の口さへ覺束なかつたので、彼は獨力でコレスボンデンスの技術を修得し、現在の外國商社に就職した。

〈野望〉は封印されたまま、彼の背後に遺された。實在と觀念、超越と内在、自由と必然、覺存、關心、限界狀況……言葉はむなしく指の間を流れ去り、遙かな地平に搖曳してゐた。それは沈み行く青春の仄かな殘照に過ぎなかつた。

その商社でも主助は空氣中のアルゴンのやうに異質な存在だつた。彼はいつまでも同輩達の安易で輕薄で功利的な雰圍氣に溶け込めなかつた。

およそ外國商社に勤務する日本人には大別して二つの型しかない。萬事に「イエッサア、イエッサア」で終始、翼々と外人の氣息を窺つてゐる卑屈な去勢されたタイプ。さうかと思ふと下請^{サブアラ}業者との間に介在して、陰險に吝な利鞘^{リシト}を稼がうとして狙つてゐるタイプ。それは尾を振る家畜と盗み食ひをする家畜の違いだけだ。しかもこの連中ときたら外國商社に勤務することに、ある倒錯した優越感をさへ感じてゐる。彼はその何れをも心ひそかに輕蔑してゐた。だが彼らを輕蔑するこの自分は何者なのか、どつちつかずの無力な存在ではないか。いづれにせよ家畜はやはり家畜なのだ。自己を意識する家畜、それは莫迦化^{モカカ}てゐた。他の社員達にとつて優越であるところのものが圭助にとつてはむしろ重苦しいひけめなのだ。

占領中はむろんのことだが、占領後も外國商社は多くの特權をもつてゐる。彼らはみな海外の銀行に豊富な資金のプールをもつてゐて、先方の貿易業者と馴合ひになりチェック・プライスで容易に關稅壁をくぐり抜けることができる。そしてそれは國內の貧弱な保有外貨が、穴の開いた樽の底からとめどもなく滴り落ちることなのであり、それはどこかでこの國の民衆のあのとめどもない貧しさにつながつてゐるのだ。かつて中國民衆の怨嗟を集めたあの買辦資本、それに似た機構の中にある自分を意識することは憂鬱だつた。どつちみち長くゐるところではない……さう思ひながらも、彼はその憂苦を非人間的な沈黙の殻に包んで、毎日與へられただけの仕事は嚴密にそして丹念にやつてのけた。それは謂はば一つの自虐であり、復讐なのだつた。だが、はから

ずもそれが却つて支配人の信頼を勝ち得る結果となつた。同輩達はまた彼をどこか偏屈で人好きはわるいが、勤勉で着實な事務家と見做してゐた。

存在とは？……あるむなしさを感じながらも彼はまだその想念に捉はれてゐた。だが〈存在〉を問ふことは愚かしい循環のなかに陥ることではないか？ その問ひかけの中に既に問はれるべき言葉を用ゐてゐるではないか？ いやそれは循環ではない。論理の遊びでもない。その問ひかけは彼はれたものが、切り開かれることを期待してゐるからだ。のつぺりした〈存在〉の囊を切り開くこと、烏賊の白い肚を切り裂くやうに……何かの塊が彼の靴の裏でグシャリと潰れた。彼は机の下に落ちてゐる事務用の海綿を踏んだのだつた。彼の不安が増大した。それは漠然とした抽象的な不安だつた。何か得體の知れぬ盲目的なそして不逞なものが自分を取りまいてゐる。

……彼は思つた。その無形な何ものかは窓ガラスを洩れる黄ばんだ午後の光にのびちぢみするあたりの物象や、電話のベルや、タイプライターの乾いた不協音や、煙草の匂と入り混つた女事務員のきつい香料の中などに介在してゐた。よく熱病に患つた人間の感じるあの異様な厭惡の情をそれは起こさせた。

やがて、それまで咳一つしなかつた部屋の中をざわめきが擴がつた。リリエンタール氏が午睡に歸つたのだ。圭助と隣りあはせに坐つてゐる額の禿げあがつた古參の社員が、サンプルの包装を解いてゐる若い社員に話しかけた。

「昨日は下請會社のお招ばれでね。お茶屋で呑んでゐたまではよかつたんだが、そのあとが大變なのさ……」

「どつかへシケ込んだんですか」

若い男は遊び人らしい氣の廻し方でニヤニヤ白い齒を見せて笑つた。

「それがね實演を見にいつたんだよ」

「實演つて例のブラック・アンド・ホワイト？」

「と思ふだらう……ところがそんなぢやないんだよ」古參の男は女事務員の席にちらつと目を移しながら小聲になつた。「何だと思ふ？ 女とワン公の實演なんだよ」

「へえ……ほんとですか」若い社員が叫んだ。

「ほんたうさ、女が縋帶で脚をぐるぐる巻きにして四つん這ひになつてゐるんだ。すると犬の奴……」

古參社員は額に油をにじませながら、得意氣にそのアクドい話を續けた。

「奇々怪々ですな、……まるで八大傳ですね」

若い社員はこもつた笑ひ聲をたてた。

「どうも後味がわるくつてね」古參社員は辯解めかしてさう言ひ添へ、つると顔を撫でまはした。ふだんなら好奇心からついて行つたに違ひないその放埒な神話もその日の圭助にはへんに重

苦しく胸がむかついた。得體の知れぬ巨大なものがその醜怪な横顔をちらりと覗かせたやうな氣がした。

五時になると仕事が残つてゐるに拘らず圭助は立ち上つて歸り仕度をした。不安が喉をしめつけてゐる。彼は息苦しくその場に居たゞまれなかつた。エレベーターの降口は人が群がつてゐる。彼はその人々を避けて階段をおりた。エレベーターの中で、他人と身體を觸れあふのを思ふだけでむかむかした。他の存在の生暖かい感觸、他人との否應なしの對峙、……階段の途中で彼は立ちどまつた。今歸るとちやうどラッシュにかゝることが思ひ浮かんた。彼は再び強い厭惡に捉へられた。これまで毎日あの人ごみにもまれながら通勤することのできた自分がそら怖しかつた。

今朝のやうなことが起こらないのが不思議なのだ。もともと俺は無器用で放心癖があつて災厄を招くやうにできてゐる。子供の頃からさうだつた。よく花瓶をひつくりかへしたり着物を鉤裂きにしたり、買ひたての下駄を割つたりして母を怒らせたものだ。少し氣をつけたらどうなのぼんやりさん……よしその邊をひと廻りして時間を消さう。——驛とは反對側の海の香りの漂つてくる方角に向つて彼は歩き出した。

街には暮方の騒音が響きあつてゐる。そのざわめきがふいと遠退く轉瞬の静けさの中に、風の運んでくる烟つたやうな氣笛の音や、クレーンの軌りや、河岸で仕事をしてゐる仲仕達の掛聲がかすかに聞こえる。圭助は橋を渡り赤錆びた大きな錠前のかゝつてゐる倉庫の建物に沿つて曲つ